（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　馬場　昭佳

「四大奇書」の一つ、『水滸伝』の現存するもっとも完全な版本は、万暦 38 年（1610）に刊行された容与堂本（百回本）である。だが、この百回本が生まれる以前以後にも、水滸物語にはさまざまな演変があった。本論文では、「宋代忠義英雄譚」を一つの切り口として、『水滸伝』の成立と受容をめぐる長い歴史の展開に新しい見通しをつけた。宋代忠義英雄譚とは、『水滸伝』成立以前の通俗文藝において流行していた、楊家将説話、岳飛説話など、英雄が北方の夷狄の強国を打ち負かす、朝廷に忠義を尽くす、奸臣によって命を狙われるという要素を持つ故事のことである。論文は序論、結論のほか、『水滸伝』の成立をめぐる第一部、受容をめぐる第二部からなる。

第一部第一章。小説『水滸伝』成立以前の梁山泊故事群においては、個々の豪傑の物語が語られるばかりで、豪傑たちが梁山泊に集結した後の征遼の物語はまったく語られていなかった。従来は蛇足と見なされることが多かったが、英雄が北方の夷狄の強国を打ち負かす征遼故事こそが、個々ばらばらの豪傑故事を結びつけ、『水滸伝』という一つの作品として成立するためのカギをにぎる重要な章段であることを指摘している。

第二章。『水滸伝』において、宋江は最後に非業の死を遂げる。だが、やはり『水滸伝』成立以前の梁山泊故事群では、その死はほとんど触れられていなかった。宋江が非業の死を遂げる『水滸伝』の結びもまた、宋代忠義英雄譚の導入によってもたらされたのではないかとする。

第三章では、史実や梁山泊故事群において重要な活躍をする張叔夜が、『水滸伝』においては端役におとしめられていることを指摘し、その理由を、本来忠義英雄としての張叔夜の役割が宋江に振られることになったせいではないかとしている。

第二部に入って第四章では、金聖嘆による七十回本が出されてから、『水滸伝』の版本は、七十回本一色になってしまったという通説に対し、乾隆中期までに著された続作などは百回本にもとづいていたことを証明し、さらに七十回本で切り捨てた征四寇の物語も、単独で刊行された作品によって知られていたことを跡づけ、通説の見直しを迫った。

第五章では、清の宮廷大戯『忠義璇図』を取り上げ、さまざまな角度から検討している。この作品では、宋江は英雄ではなく、悪人としての面が強調されている。

第六章では、清代後期に兪万春が著した『蕩寇志』を取り上げる。これも『水滸伝』の続篇をうたう作品であるが、宋江らを極悪人として描く作品であり、宋江が宋代忠義英雄として描かれていたことへの反発であると結論づけている。

歴史的背景についてさらに深く掘り下げるなど発展の余地はあると思われるものの、「宋代忠義英雄譚」という補助線を引くことによって、これまで見えなかった『水滸伝』の一側面に光をあてた論文として、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論に至った。